

## 人と会話をする動物 — 『狐物語』第12枝篇の場合

高名 康文

『狐物語』の中で、初期に書かれたとされる枝篇群では、登場人物の動物たちは自分たちの間で言葉を交わすが、人間が現れると必ず口をつぐんでしまう。物語の作り手と受け取り手の間に約束事が成り立っていると考えられるが、時代が下ってから成立したとされる作品の中にはこの約束事が崩れるものがでてくる。初期枝篇の直後の成立とされる第12枝篇<sup>1)</sup>では、ブレイユの司祭と呼ばれる人間の登場人物が猫のティベールと対話をする場面が描かれているが、ここにも初期枝篇における約束事の崩壊を見るべきであろうか？ 本論では第一に、この枝篇の作者は、むしろ問題の約束事を先行枝篇からひきついでおり、作品中でこの規範を逸脱してしまったブレイユの司祭を滑稽な人物として描いていることを指摘する。次に、約束事からの逸脱には、中世カトリック教会の非公的な祝祭である「愚者の祭り」のイメージが投影されていることを指摘する。

### 人間と動物の接触—先行枝篇における約束事とその崩壊

第12枝篇の作者が直接のモデルにしたと考えられている第14枝篇「ルナールと狼のプリモー」(L. フーレによると、1178年ごろ成立<sup>2)</sup>)では、狼イザングランの弟プリモーとルナールとが教会に忍び込んで、ミサをあげる場面があるが、そこには次のような一節が存在する。

[ルナールが彼を置き去りにして逃げる一方で]

プリモーは教会に残ります。

祭壇の前で、丸坊主になって。

歌うことに心を傾けます。

激しく鳴いたり、遠吠えしたり、わめいたりしていますが、

その声を司祭が聞きました。

彼は [さきほどの] 鐘の音も聞いていました<sup>3)</sup>。

引用部の前にはルナールに騙されて聖体ぶどう酒を飲み過ぎたプリモーがミサをあげたいと言い出し、狐から剃髪を施された上で、祭礼服をまとうというエピソードが展開されており、その至るところには両者の会話が綴られている。『狐物語』の作品群の中ではむしろ例外的なことであるが、ルナールとプリモーが登場してからこの場面までは、彼らの尻尾や毛皮といった動物の属性への言及が全く現れていない。彼らは完全な人間の相の下に描かれてきたというべきである。ところが、物語に初めて人間が介入してくる引用部においては、それまで「歌う (chanter)」と見なされてきた行為が、「鳴く (braire)」「遠吠えする (uller)」と言い換えられて表現されている。いわば登場人物が被っていた人間の仮面が剥げ落ちて獣性が提示されているのである。ルナールは既にその場から逃げ去っており、取り残されたプリモーは、集まってきた村人や司祭から攻撃を受けることになるが、その間は全く人語を発せず、動物の相のもとに打ち据えられる。

L. フーレによって、第12枝篇以前かほぼ同時期に成立したとされているこの他の作品においても<sup>4)</sup>、動物が村人や司祭、司祭の情婦といった人間たちと接触する場面が多数存在するが、第12枝篇とほぼ同時期に成立したとされている第6枝篇と第8枝篇を除いて、人間と動物の間で会話が描かれている場面は存在しない。人間と動物とのコミュニケーションのあり方とは、盗む—盗まれる、殴る—殴られるというのが一番多い。中には死に真似(第3枝篇)や怪我をしているふり(第5枝篇)といった詐術を用いてルナールが人間を騙すというものもある。いずれにしても人間と動物の会話は描かれていない。フィクションの世界では、動物と人間の間で会話が成り立っても不思議はないのであるが、『狐物語』の初期枝篇においては、その可能性は体系的に取り除かれており、人間の前で動物たちは動物の相の下に行動するように描かれるという約束事が成立していると考えられる。

ところが、先に述べた第6枝篇以降の『狐物語』では、この約束事が崩れ始める。第6枝篇では、イザングランとの決闘裁判に敗れたルナールが死刑に処せられようとしているところに唐突にグランモンのベルナールという聖職者が現れて、ノーブル王に頼んで狐を修道院に連れ帰り修行させるというエピソードがある。

この人物については、人間であるとも動物であるとも記されていないが、リモージュのグランモンに実際にベネディクト派の修道院が存在したことから、人間だと推測される。第8枝篇の冒頭にも、それまでに犯した悪事を反省したルナールが、農夫に導かれて隠者のところを訪れて罪の告白をするというエピソードがあるが、ここでも狐と人間との間で会話が成立している。第9枝篇(1200年頃)においては、農夫リエタールが物語の冒頭から最後まで一貫して、熊のブランやルナールといった動物の登場人物と何の疑問も感じないで会話をしている。第16枝篇(1202年頃)の冒頭では、農夫ベルトーが罠にかかったルナールを捕らえようとして噛み付かれるというエピソードがあるが、ここでも両者の間に唐突に会話が成立し、ベルトーはルナールに最後には臣従の誓いをたてる。また、第17枝篇(1205年頃)の冒頭では、兎のコワールが人間の皮なめし職人を担いでノーブル王の宮廷に参上し裁判に訴えるというこの枝篇に通底する「逆さまの世界」の先がけとなるエピソードがあるが、ここでも皮なめし職人がノーブル獅子王に弁明を行っている。

とはいえ、中期以降の枝篇では常に動物と人間の登場人物の間に会話が成立しているというわけではない。第7枝篇(1195-1200年頃)でルナールが修道院の鶏を襲う場面や、最後期に書かれた作品に属するとされる第13枝篇(1205-1250)の冒頭でルナールが騎士に狐狩りの対象になる場面では、ルナールは人間の前では一言も発さない。初期枝篇における約束事が活かしている作品もあるのである。

## 第12枝篇における人間と動物の接触—約束事の遵守と越境

以下に『狐物語』第12枝篇の梗概を記すが<sup>5)</sup>、丸数字を冒頭に付した3つの場面において、動物の登場人物と人間の登場人物が接触する様子が描かれている。

① 獲物を求めて家を出たルナールは、鶏を襲おうとするが、神父のユオンの一行が現れたために諦める(v.11148～111524)。

ルナールは、日向ぼっこをしていた猫のティベールを誘って連れになるが、獵師一行が現れると彼を置き去りにしてしまう。

② 猫のティベールが木の上で獵師一行の攻撃を受ける(v.11681-11721)。

②' ブルイユの司祭が登場し、獵師一行と共にティベールに攻撃を加える。(v.11722-11817)。

②" 木からブルイユの司祭の馬に飛び乗ったティベールは、そのまま馬を奪って逃亡する。それに追いついた司祭は、馬を返してくれと嘆願する。ティベールは、答えられれば馬を返すと言って質問をするが、司祭は答えられない(v.11818-11940)。

馬に乗ったティベールはルナルと再会する。再び連れ立って、プラニーに教会に行き二人して晩課を行う。

③ ティベールは、教会の中で、ルナルの策略により鐘つき紐に吊り下げられる。駆けつけてきた村人たちがこれを襲う(v.12671-12848)。

教会から逃げ出したティベールは、先に逃げ出していたルナルと再会し、からかわれ悲しくなって家路につく。

①の神父ユオンの一行とルナルとの関係、及びに②獵師一行とティベールの関係では、人間と動物の間のやりとりは言語外のものに限定されている。すなわち、動物の登場人物同士の間のお話は描かれていても、彼らと人間の登場人物との間には会話は成立していない。次に②'では、ティベールから司祭に対して

「なぜ、私を打とうとなさる？

私が罪を告解するために下に降りようとしているのに、

あなたは、悪い聴罪司祭ですね。」(v.11791-11793)

と呼びかけがなされるが、司祭の反応は以下の通りつれない。

司祭は、落ちていた棒の一つを

再び投げつけます。(v.11794, 11795)

ティベールの台詞は、司祭の耳には分節不能の「にゃあにゃあ」という音としてしか聞こえていないようである。ところが、ティベールが司祭から馬を奪っ

た②”においては、このような関係に変化が生じている。ティベールの「寓話はラテン語で何というか？」という質問に司祭は「ファーブラ」ではなく「ファバ(そら豆)」と答えているし(v.11890-11900), また, 「羊はどこで悪さをするか/尻をこくか?」という地口になったもう一つの質問<sup>6)</sup>には, 片方, それも下品な方の意味にしか気がつかないで「穴が開いた時, 尻からこく」と答えている(v.11901-11904)。このような関係は長続きするのであろうか? ティベールが立ち去った後で, 司祭が村人たちにティベールのことを話す場面には以下のようにある。

「ねえ, (神があなたさまを見守られますように。)

今さっき, わし達のところから逃げた奴が

馬に拍車をかけているのを

見ませんでしたか。」

「この司祭, わしらのことを馬鹿にしておる。」

話しかけられた者たちは言います。

「きっと狂っているのだろう。

そうでなければ, 飲み過ぎなのだ。」(v.11926-11933)

司祭が村人たちにより「きっと狂っているのだろう。そうでなければ飲み過ぎなのだ。」と言われている。動物が本来人間に固有な所作を行うということは, この枝篇の物語世界における人間たちの目からは異常だと判断されているというべきであろう。人間と動物の間に言葉が通じるというフィクションは, さきほどの場面ではほんの一瞬成り立っただけなのである。『狐物語』中期以降の枝篇の中には, 第9枝篇のように全編にわたって農夫が狐や熊と何の疑問も感じずに対話をする作品も存在することは上に見た通りである。しかし, ここで問題にしている第12枝篇の物語世界においては, 人間である登場人物が正常であるならば, その目に動物の行為は動物固有なものとしてしか映っていないというべきであろう。人間を前にすると動物は黙るという初期枝篇における約束事はこの枝篇の基調として活きているのである。動物の登場人物と人間の登場人物の世界は, 初期枝篇と同様, 隣接の関係にあるというべきであり, その境

界を越えてしまった者が異常者としてからかわれるという喜劇が成立しているのだといえる。

中世文学で「越境」といえば、真っ先にケルトにおける世界観を源泉とする「異界」への侵犯が思い出される場所である。②”の例のティベールと司祭との対話が始まる直前の場面においては、次のように描かれている。

ティベールは、拍車を入れたり、  
ギャロップで走らせたり、手綱を引いたりして、  
若駒の上に上手に腰を据えています。  
すっかり怯えた様子でついてくる  
司祭を一瞥しました。(v.11838-11842)

猫が馬に乗るという光景は、驚異(メルヴェイユ)に他ならないが、これを見た司祭は「すっかり怯えている(esfraé)」と描写されている。これはケルト起源の物語において、異界に迷い込む際に主人公やその供の動物が超常的な出来事を予感して体を震わせる様を思い起こさせる。マリ・ド・フランスの「ランヴァル」において、ランヴァルが異界の姫と邂逅する直前の場面で馬が「激しく身を震わせた」<sup>7)</sup>とあるのはその例であろう<sup>8)</sup>。また、先に引用した箇所では、現実の世界に戻った司祭が周囲の人間に馬鹿にされるというのがあったが、これも他の物語において異界から戻った人間の描かれ方(例えば、アーサー王の宮廷に戻った後のランヴァルの言行が裁判沙汰になること)と平行な関係にあるといえる。

③の場面においても、教会の中で「お勤め」をしている動物たちを見た村人が怖れを感じる場面が見られる。

猫のティベールが  
鐘を強く打ちつけており、  
また、ルナールがその横にいるのを見ると、  
あまりに恐れ、当惑したもので、  
さっと熱が出て  
兎のようにすばやく逃げ出しました。

ルナールが前に進み出て

彼に言います。「止まれ、止まれ！」

そう聞くと、彼は気が狂いそうになりました。(v.12679-12687)

動物たちは、ケルトの文脈でいえば、死者の国の人々ということになるのであるが、場所が教会であるだけに、『狐物語』第12枝篇の物語世界の人々にはキリスト教化した文脈でとらえ直されることになる。逃げ帰った村人による他の村人たちへの説明は以下の通りである。

悪魔が一匹紐にぶらさがっていました。

作り話だと思わないで下さい。

その隣には、もう一匹いました。(v.12721-12723)

この後、教会では村人一同により悪魔祓いの儀式が始められる。

実は、人間の登場人物たちが動物たちを悪魔と見なす背景には、第12枝篇に先行する枝篇の伝統がある。というのも、L. フーレにより初期枝篇の一つに数えられている第15枝篇においては、ティベールがやはり、二人の聖職者から馬を奪うエピソードが描かれており、登場人物たちが彼のことを悪魔呼ばわりする場面が存在する<sup>9)</sup>。中世から今日に至る時代の民間伝承における猫のあり方については、J. デュフルネに詳しい研究があるが<sup>10)</sup>、極めて悪魔に結び付けてとらえられやすかったといえる。

第12枝篇に登場する人間たちから見れば、動物たちは平常においては動物の相に留まっている。これらが唐突に人間のように馬に乗ったり話したりし始めると、人間たちはそれを驚異であるにとらえて、その驚異を彼らなりのやり方で合理化する。自ら合理化できないブルイユの司祭は、他人から「恐らく酔っているから」という説明を下され、恐れつつもまだ判断力を残している村人たちは悪魔の仕業であるという説明を下している。以上に見た3つのエピソードにおける人間たちは、まことに人間らしい姿で描かれていると言うべきであろう。

## 越境の論理—愚者の祭りのイメージ

上に見た通り、第12枝篇の作者は動物の登場人物たちは人間の前では言葉を発しないという先行枝篇における約束事を受け入れつつ、ブレイユの司祭という越境者を作品の中に配している。この越境者の性質を探ることでこの小論を締めくくることにしたい。

村人たちがこの司祭を酔っ払いであると評していることは、先に見た通りであるが、これは単に彼が道徳的に墮落した田舎の司祭であるということを表しているのだろうか？ この時、村人が司祭をからかって述べている台詞に注目しよう。

司祭殿、愚者の祭りの季節ですな。

明日、バイユーで

キャベツ配りの大祭があるから

行って、祭りを見ていらっしやい。(v.11937-11940)

ここで言われている愚者の祭りとは、中世を通して行われた下級司祭による非公的な祝祭であり、パロディーとしてのミサ、滑稽な行列など、公式の祝祭のもじりの性格を持っていた。聖誕祭(12月25日)と公現の祝日(1月6日)の間の12日間の間に催されるという定義が一般的なので、第12枝篇の冒頭には「5月になった時のことです」(v.11479)とあることは一見変に思われるが、Ph. ヴァルテルの指摘によると、教会における祝祭日は上の期間や四旬節後の謝肉祭の期間のみに限られるのではなく、一年を通して約40日毎に行われていたということである。5月には、キリスト昇天の祝日の頃に催される祝祭があり、引用箇所ではこれが「愚者の祭り」と呼ばれていると考えられる<sup>11)</sup>。また、このブレイユの司祭がティベールを襲う村人たちと合流したのはブラニーの教会に向かう途中であったのだが、この移動については話者から次のような説明がされている。

ブラニーに行って

市に行ってしまった司祭の代わりに



[聖務日課で]歌わなければならないからです。(v.11724-11726)

一見、『狐物語』に頻出する田舎司祭の不品行への言及かと思われる箇所である。実際に、ティベールが村人たちに襲われる場面ではプラニーの司祭の情婦が登場するわけであるが、ここでは別の解釈を提出することにしよう。患者の祭りの日に正式な司祭に代わって聖務日課を行う司祭とは何者であろうか？ それは、現実の世界においてはこの祭りの担い手である下級聖職者、患者の司祭である。ブルーユの司祭はこのことを全く意識していないように描かれてはいるが、物語の中ではその役割を担っている。患者の祭りの一形態であるろばの祭りにおいて祭式者たちが教会にろばを導き入れるごとくに、彼は物語の中でティベールに儀仗馬と典礼書一式を「譲り渡し」て、祭りを進行させるのである。そのように考えれば、先に見たティベールの質問に対する道化た答えぶりにも納得がいくというものではないか<sup>12)</sup>。

更に、作品の結末部でルナールは、ティベールをからかう台詞の中で、嘘か誠か、ルナールがブルーユの司祭と連名で修道院長のユオンに裁判を起こした、ティベールは召喚を受けおり、判決は大司教に委ねられていると述べている。ここで言われている修道院長のユオンとは誰なのか？ 第12434詩行にもこの人物の名前が見られるが、そこでは「信心会修道院長のユオン (Huon le doian au couvent a la confrarie)」とある。Ph. ヴァルテルは、ルーアンには昇天祭前の三日間(第12枝篇の舞台になっている5月頃)に繰り広げられる豊穰祈願の祭りを実行する団体があり、互選、あるいは選挙により選ばれた長は「修道院長 (abbé)」と呼ばれていたことを指摘して<sup>13)</sup>、この部分と結び付けて解釈しているが妥当であろう。修道院長のユオンとは、患者の祭りにおける親玉ということになる。

動物と会話をした、あるいは会話が予定されている人物は、ブルーユの司祭にせよ、修道院長ユオンにしても患者の祭りの参加者だけであるということになる。『狐物語』第12枝篇に内在する論理によれば、動物と人間の世界を隔てる壁を人間の側から越えていく者は患者ということになる。

## 注

- 1) 本論では、『狐物語』の各作品の呼称については、E. マルタン版 (Ed. E. MARTIN, *Le Roman de Renart*, 3vols., Strasbourg, Trübner, 1882-1887) における枝篇番号を用いる。
- 2) 本論では、各枝篇の成立年代については、L. FOULET, *Le Roman de Renard*, Paris, Champion, 1914, p.118 を参照している。フーレの年代測定に対しては、近年、K. ヴァーティールらによって説得力のある異論が提出されているが、対案となる年代測定はまだ提出されていない。
- 3) マルタン版第 14 枝篇の v.466-471 を試訳した。
- 4) 以下にあげる枝篇について、フーレは、第 2-5a, 5, 15 枝篇が 1174 年から 1177 年頃、第 3, 4, 14 枝篇が 1178 年頃、第 1, 1a, 1b が 1179 年頃、第 10 枝篇が 1180-1190 年頃、第 6, 12, 8 枝篇が 1190 年頃に成立したと推測している。
- 5) 本論では、第 12 枝篇のテクストには M. ロック版 (Ed. M. ROQUES, *Le Roman de Renart. Branches X-XI éditées d'après le Manuscrit de Cangé*, Paris, Champion, 1958) を用いる。要約した箇所や引用箇所に付す行番号は、ロックが定本とした写本全体における行番号である。なお拙訳を昨年勤務校の紀要に発表している。(リシャール・ド・リゾン作、高名康文訳、「ティベールの晩課」(『狐物語』第 12 枝篇)の翻訳と注、『福岡大学人文論叢』, n°36-4 (2005), p.1201-1231 ; n°37-1 (2005), p.213-240.)
- 6) 「羊はどこで悪さをするか」の原文は、*«par ou chievre poit»*。poit の原形は、peser (悪さをする) であるとも peter (屁をひる) であるとも解釈できることによる。
- 7) Marie de France, *«Lanval»*, in *Les Lais de Marie de France publiés par Jean Rychner*, Champion, 1973, v.46.
- 8) L. フーレが『狐物語』の最初の枝篇と提唱している『狐物語』第 2-5a 枝篇で、ルナールがイザングランの巣穴に迷い込む際にも怯えを感じている場面があるが、この後にエルサンとの姦通が描かれることを思えば、これ等はブルターニュの物語のパロディーである。
- 9) マルタン版 (前掲書) の第 15 枝篇の v.459 行以下。

- <sup>10)</sup> J. DUFOURNET, «Dossier sur le Chat», dans *Le Roman de Renart, Branche XI, les Vêpres de Tibert le Chat, traduites en Français moderne par Jean Dufournet*, Paris, Champion, 1989, p.63-145.
- <sup>11)</sup> Ph. WALTER, «Renart le Fol. Motifs carnavalesques dans la Branche XI du *Roman de Renart*», in *Information littéraire*, n°5 (1989), p.3-13, p.4 を参照。また, キャベツ配りにについても, キャベツは二日酔いを治すという民間信仰があり, 祝祭日に大騒ぎをした翌日に食べる慣わしであったということである。J. FLINN, *Le Roman de Renart dans la Littérature française et dans les Littératures étrangères au Moyen Age*, Tronto, University of Tronto Press, 1963, p.81sq. を参照。
- <sup>12)</sup> 動物たちによる晩課は, 愚者の祭りのイメージの反映に他ならないが, 動物たち自身もこのことを意識しているように読める一節が存在する。ルナーが鐘つき紐にぶらさがるティベールに述べる台詞。「お前さん, 今晚, 祭りの晩課で/告解をしていないじゃないか。」(v.12556, 12557)「祭り」の原文は «la feste» である。
- <sup>13)</sup> Ph. WALTER, *op.cit.*, p.8.

福岡大学人文学部

## L'animal qui parle avec l'homme — le cas de la branche XII du *Roman de Renart*

Yasufumi TAKANA

Dans les premières branches (selon L. Foulet) du *Roman de Renart*, les personnages animaux, qui s'expriment entre eux, se taisent toujours dès qu'un personnage humain entre en scène, ce qui fait penser à une convention littéraire établie entre les auteurs et les auditeurs du roman. Mais au fur et à mesure que le cycle renardien se développe, cette règle n'est plus toujours respectée et on commence à observer les animaux qui parlent avec les hommes (les branches IX, XVI et XVII, par exemple).

Dans la branche XII (Vêpres de Tibert) composée juste après les premiers *Renart*, un personnage humain, appelé prêtre de Breuil, apparaît et a un dialogue avec Tibert le chat. Est-ce qu'on peut voir là aussi un écart par rapport à la convention partagée par les premières branches? Dans la présente étude, nous démontrons d'abord que l'auteur de la branche XII reprend plutôt l'accord littéraire en question et que grâce à celui-ci, il produit un effet comique autour de son personnage : on se moque de celui-ci qui raconte des bêtises selon la norme sociale du récit. Nous faisons ensuite remarquer que l'image de la fête des fous se projette sur la transgression de cette norme par le prêtre.

Université de Fukuoka  
Faculté des Sciences humaines